



TITLE:

<記事>6.研究報告抄録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

<記事>6.研究報告抄録. 瀬戸臨海実験所年報 2002, 15: 16-16

ISSUE DATE:

2002-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179004>

RIGHT:

## 6. 研究報告抄録

瀬戸臨海実験所研究報告 (Publications of the Seto Marine Biological Laboratory) 第39巻第2/3号が、2002年3月31日に発行された。掲載論文6編、総頁数92頁。

39巻第2/3号 (2002年3月)

論文 1. Shimomura, M. & Mawatari, S.F.: Munnidae from Japan (Crustacea: Isopoda: Asellota). [下村通誉・馬渡俊輔: 日本産ムンナ科 (甲殻綱: 等脚目: ミズムシ亜目)]. 日本産ムンナ科として、*Munna* 属 6 種と *Uromunna* 属 1 種を記録した。*Munna* 属のうち 2 種は新種で、1 種は日本初記録である。また *Uromunna* 属の 1 種については、新しく採集された材料を基に、再記載を行った。(45-73頁)

論文 2. Raveendran, T.V. & Harada, E.: Impact of predation by *Ostracion immaculatus* (Pisces: Ostraciida) on the macrofouling community structure in Kanayama Bay, Kii Peninsula (Japan). [一・原田英司: 紀伊半島鉛山湾におけるハコフグの摂食が大型汚損生物群集構造に与える影響]. ハコフグの摂食が汚損生物群集構造に与える影響を調べるために、紀伊半島鉛山湾で FRP パネルを使った野外ケージ実験を行った。摂食の影響は甚大で、特にホヤ類で顕著であった。またコケムシ類とフジツボ類でも、有意な差が認められた。(75-87頁)

論文 3. Raveendran, T.V. & Harada, E.: Macrofouling community structure in Kanayama Bay, Kii Peninsula (Japan). [一・原田英司: 紀伊半島鉛山湾における大型汚損生物群集構造]. 紀伊半島鉛山湾における大型汚損動物群集構造を調べるために、FRP パネルを基質とした暴露実験を約一年間に渡り行った。群集構造は、コケムシ類・ホヤ類・多毛類・フジツボ類など、40 種以上から構成される複雑なもので、ファウナの構成要素は、明確な季節的傾向を示した。またデンドログラム分析により、群集の遷移が三つのステージに分けられた。(89-102頁)

論文 4. Xing, Y. & Wada, K.: Temporal and spatial patterns of the alga *Cladophora conchopheria* on the shell of the intertidal gastropod *Turbo coronatus coreensis*. [一・和田恵次: 潮間帯性腹足類スガイの殻へのカイゴロモの時間的空間的付着パターン]. 田辺湾のスガイの殻には、緑藻のカイゴロモが多く付着している。大型個体では付着量の季節変化は認められなかったが、小型個体では二月から四月にかけて付着が見られなかった。ヤドカリが棲む殻は生貝の殻に比べ付着が少なく、また付着の増加と殻の成長には相関はなかった。生貝とヤドカリが棲む貝を使った室内飼育実験では、一様に付着の減少が見られたが、減少率に季節あるいはヤドカリの有無による違いは無く、また付着の量による貝の生存率にも違いはなかった。(103-111頁)

論文 5. Murakami, C., Adrianov, A. & Shirayama, Y.: Taxonomic study of the Kinorhyncha in Japan I. *Pycnophyes tubuliferus* Adrianov, 1989 (Kinorhyncha: Homalorhagida) from Japan. [村上千里・一・白山義久: 日本産動物動物類の分類学的研究 I. 日本産 *Pycnophyes tubuliferus* (動物動物門: ホマロラガエ目)]. 田辺湾の泥質堆積物から採集した動物動物 *Pycnophyes tubuliferus* を再記載した。これはホマロラガエ目の日本初記録であり、動物動物としては日本で四番目の属である。この種はこれまでロシア及び韓国の日本海沿岸で採集記録があり、基本的な分類形質について、これらの産地の標本と比較し、新たな種特徴を提唱した。(113-127頁)

論文 6. Itani, G.: Two types of symbioses between grapsid crabs and a host thalassinidean shrimp. [伊谷行: イワガニ類と宿主のアナジャコ下目甲殻類との間に見られる二つのタイプの共生]. アナジャコの巣穴から、二種のヒメアカイソガニ属のカニが採集された。トリウミアカイソモドキは巣穴に共生しているのに対し、未記載種のカニはアナジャコの腹部にしがみついてぶらさがっている。両者の共生の特徴や行動様式を、野外実験及び室内観察により比較した。未記載種によるアナジャコへの共生は、カニ類による他の十脚類への外部寄生の最初の例である。(129-137頁)

(編集委員会)